① 新金沢発掘隊SKOP推進事業

地図から始まる街づくり、地図から広がる街づくり

1 新金沢発掘隊SKOPとは

●金沢の魅力興しのために住民と学生と行政職員が手を組んだ～区役所と大学、区民によるパートナーシップ型街づくり集団の誕生

新金沢発掘隊SKOP（SEA OF KANAZAWA OPERATION PROJECTの略称）は、「海を生かした金沢の街づくり」をテーマにした平成三年度の金沢区職員の自主研修をきっかけに始まった。活動のそもそもの目的は、金沢区の特色ある魅力資源の発掘とそれを生かした街づくりの実践。会の事務局機能の一翼を、区の職員が業務外のボランティアとして担い、また、街興しイベント等の企画実行部隊として、横浜市立大学学生のグループが継続的に参加している。さらに、「金沢まちづくりの会」や「金沢子連れマップの会」といった多様な住民層が会の企画運営スタッフとして参加している。

2 パートナシップ型街づくりに向けてのSTEP1

●ガリバーマップでサイレント・マジョリティの顔が見えた～巨大地図を使っての地域ニーズ・資源の掘り起こし

ガリバーマップイベントとは、一千五百分の一程度の明細地図を張り合わせてつくった五メートル四方の金沢区図（ガリバーマップ）をイベント会場に持込み、そこに参加者である不特定多数の区民に裸足になって自由に乗ってもらい、自分の家探しから始まって、区内の好きな場所・嫌いな場所、史跡やビューポイント、ホタルやタヌキなどの生き物情報、果てはおいしいお店からデートスポットまで、個々人の持っている金沢区に関する「街ネタ」をノンジャンルで思い思いに地図に直接書き込んでもらおうというもの。

平成五年一月十五日に金沢地区センターのプレイルームを借りて行われた第一回のガリバー地図イベントは、その日だけで八十人以上の区民が参加し、多くの参加者が臆することと無く靴を脱ぎ、地図上に乗り、熱心に書き込みを行った。その後、ガリバー地図は、SKOPが別のイベントを企画実施する場合でも、併せて実施されることとなり、現在まで推定六百人以上の区民によって書き込まれた様々な情報が地図上に記載されている。

ポイント1　ガリバーマップは、参加者のコミュニティ意識を覚醒する

ガリバーマップは、まず参加者に街全体の広がりを鳥のように俯瞰する眼差しを提供する。そして参加者が、地図と対話（書き込み・読み込み）を始めることで、それまでは、機能的な点としてしか捉えられなかった街が、様々な情報の有機的な繋がりによって面的な広がりを持った空間として浮かび上がってくる。さらには、地図への書き込み情報をもとに見知らぬ参加者同士の間で、対話が生まれ、地図上で複数の参加者による「井戸端会議」が必ずと言って良いほど展開される。ガリバーマップは都市生活者の眠れるコミュニティ意識をよび覚ますのに有効なメディアだ。

●「死んだ名所旧跡」よりも「生きて動いている場」が面白い～「ガリバーさんの足跡探し」（街歩きワークショップ）で街に出る

「ガリバーさんの足跡探し」（街歩きワークショップ）とは、ガリバー地図に書き込まれた情報に基づいて、実際にそれぞれの資源（街ネタ）が存在する現場に赴き、見る、聞く、話す、触るなど参加者が五感を駆使する形で、資源を体験的に確認して見るという趣旨で企画されたもの。

金沢区ガリバーマップに一通りの情報が集積された後、平成五年から平成六年にかけて、「広報よこはま」やチラシ等を通じて広く区

データ

事業主体	金沢区役所
事業名称	新金沢発掘隊SKOP推進事業
事業年度	平成３年～
参加形態と対象	市民、横浜市立大学学生、区の職員（平成７年度まではボランティア参加、平成８年度からはパートナーシップモデル事業と連携し、業務として位置づけられた）による企画段階からの参加と協働

民に参加を呼び掛け、三回の〝足跡探し〟を実施した。すなわち平潟湾周辺の金沢八景地区を対象とした「金沢八景道中膝栗毛」であり、区南部の六浦地区を流れる侍従川流域にて行った「行け行け侍従川」であり、そして区北部の埋立地（幸浦・福浦）と旧海岸線（富岡～柴）をカバーするエリアで実施した「トワイライト・トライアングル・トラベリング」である。ガリバー地図に書き込まれた数多くの情報（資源）を検討し、コースを組むにあたっては、それぞれのエリアにおいて一般的に認知されてきた「景勝の地」や「名所旧跡」よりも、その場所や資源にこだわり、保全活用するために活動している主体（地域住民）が存在しているものに主にスポットを当てた。

ポイント2　街歩きワークショップは資源への視点を転換する

「不特定多数の固有名詞の生活者」の視点から街の中の微細な場所や資源に光を当てるガリバーマップは、水、緑、史跡といった行政が考えている定形的なアメニティ資源のイメージを突き崩す。金沢区ガリバーマップに書き込まれた情報を読むと、地域住民から支持を受け、実際に活用さえされていれば「学校の裏庭の小さなトンボ池」や「歯車工場の屋根裏のコンサートホール」、「シャコパンを売るパン屋」等の日常的な空間がいつでも魅力的なアメニティ資源になるということを実感として教えられる。そしてアメニティ資源が魅力的であるためには、それを愛し継続的にかかわり続ける個人及び団体の存在が不可欠であるということに気づかされる。

必然的に、「ガリバーさんの足跡探し」は、それぞれの現場でアメニティ資源の保全活用にかかわっている地域活動団体及び個人に対するインタビューツアーの性格を帯び、参加者が地域活動へコミットメントするためのノウハウを実践的に交換し、学ぶ場となった。

3　パートナーシップ型街づくりのためのSTEP2

●「街づくりマップ」で区の特色が浮かび上がった～活動の中間総括・金沢面白不思議地図「金澤発見伝」の編集発行

ガリバーマップや街歩きワークショップの成果をより多くの区民とわかりやすい形で共有化するため、新金沢発掘隊SKOPは、平成六年七月に一枚のハンディなイラストマップを編集発行した。それが金澤面白不思議マップ「金澤発見伝」である。地図の表面は、SKOPのメンバーの一人である横浜市大生が、野島展望台から眺めた金沢区の俯瞰図をイラスト風に描き、裏面はガリバーマップと街歩きワークショップによってSKOPが発掘したアメニティ資源とそれにかかわる地域活動団体の活動の様子を区南部の「侍従川・平潟湾流域」、区北部の「埋立地と旧海岸線」のそれぞれのエリアごとに絵巻物語り風に描いている。

このA2サイズ・両面カラー印刷の絵解き地図は、発刊当初マスコミに大きく取り上げられたこともあり、購入希望の区民が殺到し、初刷りの二千部は、三か月程で底をついてしまった。

ポイント3　「金澤発見伝」で表現された地域文化生活圏

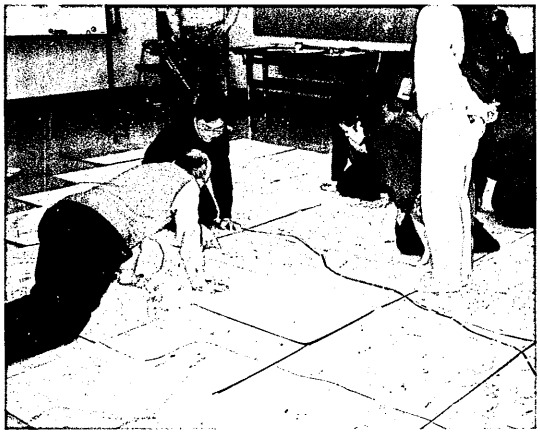
「金澤発見伝」の最大の成果は、ガリバー地図によって発掘されたアメニティ資源とそれにかかわる地域活動団体及び個人を、丘陵地や海岸線、河川等の金沢区の自然地形に沿って繋ぎ併せることで、区域に幾つかの地域的なまとまり、いわば「地域文化生活圏」といったものを浮かびあがらせたことである。

例えば、金沢区には他の横浜市の行政区にない特徴として、源流から海域までを貫く、完結した水の軸線（朝比奈の森～侍従川～平潟湾～野島海岸～東京湾まで連なる土地自然システムはその一典型だ）が存在しており、それに沿って環境的なアメニティ資源のみならず、鎌倉時代から江戸時代までの歴史的アメニティ資源も集積している。さらに、地域住民団体及び個人のアメニティ資源を巡る保全活動もこの「水の軸線」を意識して行われている。

「金澤発見伝」は、金沢区がこのようなアメニティ資源の連なりと住民主体とのかかわりのありかたによって映しだされる「地域文化生活圏」の連合体であるということを、子供でも楽しめる絵巻物語によって表現している。

4　パートナーシップ型街づくりのためのSTEP3

●「イベント」（共同作業）を通じて流域の住民団体が結び付いた～「金沢水の日」で森と川と海と街をネットワーク



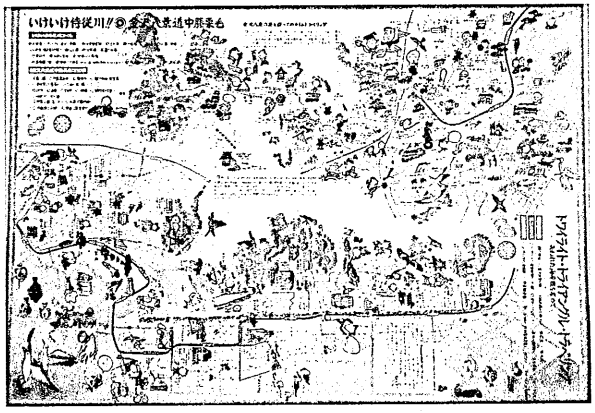
「金沢水の日」は、新金沢発掘隊ＳＫＯＰが、ガリバーマップによって発掘し、街歩きワークショップによって出会い、「金澤発見伝」で描いたアメニティ資源にかかわる―特に「水の軸線」をフィールドとする―市民団体に呼び掛け、ネットワーク型の実行委員会を結成したことに端を発している。第一回「金沢水の日」実行委員会は、七つのテーマコミュニティ（海をつくる会、金沢野鳥クラブ、大道ふるさとの生き物と自然に親しむ会等）とボランティア協会等の団体機関によって構成された。イベント自体も、平成六年十一月十三日を金沢水の日と実行委員会が独自に宣言し、区内の水辺の至る所で同時多発的に行われるネットワーク型の総合イベントという形式をとった。

企画内容は、例えば、野島海岸のクリーンアップ活動や野島の海水を使っての「塩づくり」、水性植物の植栽による侍従川のエコアップやイカダ下り、平潟湾でのカヌーフェスティバルから長浜野鳥観察池でのバードウォッチング、そして朝比奈、釜利谷、富岡への源流ウォーキングと涌き水コーヒーの試飲会等。水にかかわるアメニティ資源の可能性をあらゆる角度から体験しつつ探求しようというものになっている。

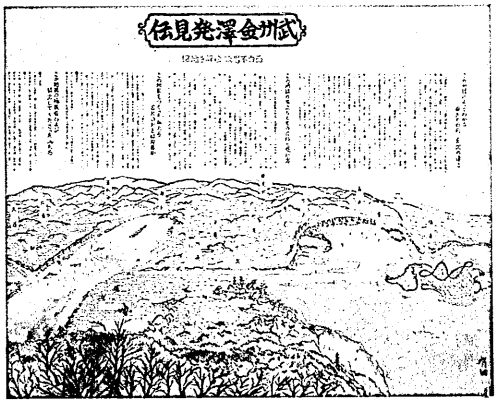
さらに、昨年実施した第二回金沢水の日では、公募による個人参加のスタッフが新たに実行委員会に加わると共に、侍従川流域の連合町内会等の地域コミュニティとの連携も出来つつある。

ポイント4　「金沢水の日」はジョイフルに資源と主体をネットワークする

「金沢水の日」は、地図から生まれた新しいネットワーク型のイベントとして以下の特色を持っている。一つは、実行委員会を構成するメンバーが七十歳の高齢者から中学生まで、楽しみながら、自発的に参加していること。また、〝体を動かし汗をかいてこそナンボ〟といった集まりなので、会議の場で意見言い放しという姿勢の人は自然と居場所がなくなる。さらに、「金沢区の水環境の歴史性や風土性を新しい形で蘇らせる」というビジョンを実行委員会のメンバー全てが共有化しているため、イベント内容が多様なわりには、方向性が明確であり、市民団体のネットワークによって「地域文化生活圏」のマスタープランを提案しようという動きすら出てきている。



5　今後の展望と課題

新金沢発掘隊ＳＫＯＰは、これまでの五年間に及ぶ様々な活動（今回ここに記述したのは、その一部である）に区切りをつける意味で、平成八年三月十日に横浜市立大学体育館において、「横濱金澤地図博覧会」を開催。区内及び市内の様々な街づくりグループの協力によって、区民の手作り地図を中心に二百点以上もの地図を展示。金沢区及び横浜市の様々な分野のアメニティ資源や地域街づくり活動の現況をビジュアルに表現し、一日だけで千二百人もの参加者を集めて、盛況のうちに幕を閉じた。

平成八年度は、金沢区が横浜市パートナーシップ推進モデル事業の総合モデル区に指定されたのに伴い、金沢区全体の事業ネットワークの中で、組織的にどのような役割を果たすべきか新集団としての生まれ変わりも含めて現在メンバー間で検討中である。